

AFTERNOON TEA

「気づき」を与えてくれる存在

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科

山下 哲

公益財団法人東京都医学総合研究所・睡眠プロジェクトの夏堀晃世さんからバトンを受け取りました。夏堀さんとは、当時私が所属していた名古屋大学環境医学研究所のラボと、当時夏堀さんが所属していた慶應義塾大学精神神経学のラボとの合同ミーティングで知り合いました。私は、自由に行動するマウスの脳深部から、神経活動に伴うカルシウム蛍光を計測する手法の開発に携わっていましたが、夏堀さんも同じようなシステムを開発中だったので、そこで色々と情報交換をさせていただきました。「最大のライバルであり、目指す先であり、良き協力者でもある」といった存在でしょうか。夏堀さんの助けもあり、今ではシグナルが取れるようになりました。

実は私には、1歳になったばかりの娘がいます。初めての子育てに奮闘中です。半年前はハイハイすらできなかったのに、もう最近では10歩くらい歩けるようになりました。つくづく赤ちゃんって成長速いなど感心してしまいます。言葉はほとんどしゃべれませんが、いないいな〜？という「バァ」と返してきたり、母親がいなくなると「ママァ」と呼んだりします。「パパァ」ともごくたまに言います。また、遠くでカラスの鳴き声が聞こえた時は必ず「カァカァ」と言います。これが相当な頻度で、確実に「パパァ」より多いです。なぜそれを覚えた？と思いましたが、彼女にとってはとてもインパクトのある存在だったのでしょう。

しゃべれない、ということは意思の疎通ができない、ということです。当然のことですが、こちらの気持ちをくみ取ってくれることもあります。いわゆる「空気を読む」というようなことがまだできません。私は父親なりになんとか子育て

に参加しようと奮闘中ですが、正直下手くそです。母親はとても上手に娘を笑わせるのですが、私と同じことをしてもあからさまに笑いません。他にいろいろなネタを試してみるのですがなかなかうまくいきません。赤ちゃんは「パパが頑張って笑わそうとしてるし少しくらい笑ってやるか」とはなりません。面白くないものは面白くないのです。でも、それが逆にわかりやすいのです。普段の大人の社会では、ほとんどが「気遣い」で成り立っています。多分大人相手だったら愛想笑いくらいはしてくれるでしょう。しかしそれでは、現状で良いのだと満足をしてしまい自身の成長になりません。しかし赤ちゃんははっきり「No」を示してくれるので、こちらも改善することができます。これってすごい大事だなと思いました。気遣いも行き過ぎるとマイナスに働くということを改めて認識させられました。というわけで、どうあやせば良いのか日々勉強です。

そんな中ついに、困った時はこれさえすれば満足してくれるという「武器」を手に入れました。それは「たかいたかい」です。しかし、普通の「たかいたかい」ではありません。まず、胸ぐらいの高さで持ち、そこから上に両手を限界まで伸ばし娘の頭が天井につきそうなくらいあげ、また胸ぐらいの高さまで下げる。これを、割と速いスピードで何回も繰り返します。酔わないかと心配になるくらいの速さですが、それくらいをよく好みます。娘の体重は10kg弱です。例えるなら10kgのダンベルを全速力で自分の胸の位置と頭上の間を上げ下げしているのです。これが超絶辛いです。情けないことに1セット7~8往復くらいが限界です。これでも、100m走を全力疾走したくらい息切れになります。でもそんなのはお構いなし。

すぐ「もっともっと」とせがんできます。これがエンドレスに続きます。私も嬉しいので力を振り絞ってやるのですが、最終的には腕が上がらなくなり、私からギブアップします。しかし赤ちゃんはそんな私の様子を見て「そろそろパパ辛そうだし今日のところはこの辺にしといてやるか」とはなりません。

実は、こちらの気持ち・都合をくみ取ってくれない存在が、これまでも身近に存在していました。実験動物（マウス）です。私は行動実験を行うことが多いので、実験の際はコンディションをきっちり揃えて綺麗なデータが取れるように努力します。何よりも動物のご機嫌を最優先で、実験がかなり長引くこともしばしば。時には「こんな

に気を使って環境を整えているのに、何が気に入らないんだ」とイライラすることもありました。それが、娘が生まれて子育てに奮闘するうちに、驚くほど寛容になりました。向こう（実験動物）からしたら、実験者の都合なんて知ったことではないわけですから、思い通りにならない・時間通りにいかないのは当然のことであるという、あたり前の事実が、より受け入れられるようになったのです。

そんな新たな「気づき」をたくさん与えてくれる存在、これが僕にとっての娘です。最終的にただの親バカ日記になってしまいましたが、最後まで読んでくれた方、ありがとうございました。



杏林大学医学部細胞生理学教室

藤原 智徳

日頃同じフロアーで仕事をしている縁で杏林大学医学部統合生理学教室の中島先生から引き継ぎました藤原です。これまで *afternoon tea* を読んだことがなかったので、この機会に改めてながめてみたところ、しっかりとした内容で、意外と面白い企画だなーとちょっと驚きました。せっかくなので恥ずかしくない構成にしたいと思っていましたが、考えれば考えるだけ手が進まなくなりましたので、本当に「自由気ままに」思いついたことを書かせていただきます。

私は大分県の国東半島にある自然環境に恵まれた地域で生まれ育ちました。出稼ぎ生活があつという間に30年近くなり、気が付けば町が市になり、卒業した学校も統合し、すっかりよそ者になってしまいましたが、今でも地元を大切にしているつもりです。学生時代は部活ばかりだったのですが、研究室って楽しいのかな？と思ったのをきっかけに、それ以降身の程をわきまえず将来設計もないまま、面白そうなことを求めて今に至る

という感じです。生理学会員になったきっかけは赤川公朗教授に拾ってもらい、杏林大学生理学II教室（現細胞生理学）において開口放出の制御に関わる *syntaxin1/HPC-1* に着目してシナプス伝達の制御機構について研究することになってからです。（ちなみに、赤川先生はこの3月で定年をむかえ、4月から新たに寺尾安生教授を迎え、新しい研究室がスタートしたところです。）当初は生化学・分子生物学的な仕事をやっていましたが、最近ではガラッと変わってもっぱらマウスの行動解析が中心で、情動、社会行動、シナプス、モノアミンといったキーワードに興味を持っています。

もちろん研究にはまり込んでいますが、研究以外ではランニングにハマっています。学生時代は本当に嫌だったはずなのに、なぜだか通勤の往復+週末で時間の許す限りジョグしており、年に数回フル、ハーフなどロードレースに出ています。自分なりにハマってしまった理由を考えると、具体的に目標を立てて練習したら、タイムと

いう目に見えてわかる結果に現れるところではないかと思います。そのため日頃味わっている、思うような結果が出ない実験のストレス発散になっているようです。また大会に出て色々な人と出会うことも楽しみです。そんな中で数年前にあるレースで出会った方にトレイルランを勧められました。トレイルランは未舗装の山道などを走るレースで、簡単に言うと大人の泥んこ遊びです。初めはそれほど乗り気ではなかったのですが、ロードの練習のつもりで思い切って参加してみたところ、予想以上に楽しく、今ではすっかりトレイルランの虜になってしまいました。大会に参加しているうちに、トレイルランは山でのルールを守り、タイムより完走することが大切ということがわかりました。参加者は40代50代の人が多いようで、同世代の人と遊べるのも魅力の1つです。またロードレースと違ってレース中でも他の参加

者と話す機会が多く、きついながらも楽しく参加できるのも楽しみです。さらに、レース後の風呂→ビールも格別です。ただ危険も伴うのでしっかりとした準備は必要ですが（この準備も楽しみの1つかもしれません）。これまでは研究だけで十分に満ち足りた時間を持てると思っていたのですが、他にも楽しめること（行き詰りそうな研究生活の逃げ道かもしれませんが）を見つけられて若干でも人間の幅が広がるかなと期待しています。一生懸命やって結果を出すのは何をやっても楽しいから、研究でもレースでも歯を食いしばって一歩一歩自分の足で前に進むことの大切さを改めて感じる今日この頃です。いずれにせよきつく苦しいことを乗り越えるのが楽しいと思ってしまうあたり自分はマゾ基質なのでしょうね。まとまりのない自己紹介みたいなものになってしまいましたがこのあたりで終わりにさせていただきます。